

桜蔭俳話会 十一月句会 (第三一〇回)

会場・桜蔭会館

平成二十四年十一月二十五日(日)

4点①大根煮る夫の背わづか丸くなり

友子

银杏黄葉丸座になりて絵の描く

ヤエ子

新しきはうきに落葉絡みをり

ヤエ子

冬服で商店側を宅近し

真三

梁上ぐるジャツキの軋む小春かな

明美

ボランティアの集ふ並木や落ち葉掃き

友子

待つひとを傘に見つけし時雨かな

秀一

体脂肪味覚の秋の落し穴

幸

3点 律儀なる冬の噴水背ナ伸ばす

秀一

今は亡き猫の餌皿冬日射す

秀一

2点①元氣だと送るメールや風邪の粥

ツル子

洗面に気合ひの入れし凍ての朝

ヤエ子

① 伐採の赤きテープや枯木山

守

冬始点東京駅の赤れんが

真三

① 暮れ初めし街や落ち葉に追ひ越さる

友子

新蕎麦を挽く水車富士映えて

幸

① 結界の縄の一本浮寝鳥

守

(不在投句 古野明美)

名残りの蚊満腹にして逃がしけり

幸

藁屋根の千木のどつしり冬ざるる

明美

山波を見下ろす谷の紅葉燃ゆ

幸

動きあるものは釣り人冬の河

守

落慶のまぶしき寺の小春かな

ツル子

1点①冬めきて和風庭園整ひぬ

真三

① わらべ押す冬木の頑と動かざり

明美

スケートのスピンの軸の揺るがざり

明美

初冬なりオーシャンブルー咲き連らな

真三

何事もひとりはさびし返り花

秀一

樺枯れて光満ちたる林かな

ヤエ子

舞ひ落つる冬蝶デフレスパイラル

守

あらかたの家財捨て来し石露の花

明美

長き夜や時刻む音の大きな

ヤエ子

病葉散り初冬の星となりし友

幸

宅配のはやる心の今年米

ツル子

刻すぎて友との集ひ秋深し

ツル子

※

湯豆腐にほろ酔ふ父の影ありて

ツル子

水鳥の水に飽くれば空へ啼き

守

浅漬の匂ひと共に帰りけり

友子

秋麗駅新たな赤煉瓦

幸

黙々とゲートボールの小春かな

秀一

寒冷の北鮮拉致の方祈る

幸

流行語大賞とかや冬に入る

友子

冬薔薇を見つけて盛り人多し

真三